

県内の「性別で分けない名簿」の使用率80%を超える！

(2021年4月現在)

なぜ「性別で分けない名簿」なのか？ 視点は「**人権尊重**」

1 男女平等の視点

学校現場で、これまで使われてきた「男女別名簿」は、「男子は先、女子は後」つまり「男性優位が前提」「男性優位を無意識のうちに刷り込んでいる」など「隠れたカリキュラム*」を含んでいます。このことは、「男性は外で仕事」「女性は家事や育児」などといった固定的性別役割分担意識を植えつけ、女性の能力開発を阻害し、社会的・文化的にも大きな損失となります。

*「隠れたカリキュラム」とは、正規のカリキュラムとは別に、暗黙のうちに、また無意識のうちに伝えられるモデルやメッセージ。ジェンダーにとらわれた意図しない教職員の態度や発信などは、毎日繰り返されることで、子どもたちにジェンダーにもとづく固定的な考え方や偏見（ジェンダーバイアス）を再生産していくことになる。

2 性的マイノリティなど多様な性への配慮

学級、学校に「女・男」といった性別で分けられることへの苦しさを感ずる子どもたちや教職員がいることを前提にしましょう。必要性もないのに性別で分けていることについて考える必要があります。

3 子どもたちの意識の変容

「男女別名簿は差別につながる」という共通認識をもちこと、「性別で分けない名簿」は平等教育の一つの手段であること、「合理的な理由もなく分けている」ことについて議論すること、そして主体である子どもたちとともにジェンダー平等*教育をすすめていくことが重要です。

*ジェンダーとは、人間には生まれつきの「生物学的性別（セックス/sex）」があります。一方、社会通念や慣習の中には、社会によって作りあげられた「女性像」「男性像」があり、このような女性、男性の別を「社会的・文化的に形成された性別（ジェンダー/gender）」といいます。性別にかかわらずすべての人の人権が尊重され、その個性と能力が発揮できる男女共同参画社会は、ジェンダーにもとづく偏見や差別、性別による固定的な役割分担等を主伯父させるジェンダー・ギャップ（男女格差）を解消し、あらゆる分野におけるジェンダー平等の実現をめざします。